

# 専属秘書は極上CEOに囚われる

*Yoshino & Atsubiko*

---

有允ひろみ

*Hiromi Yuuin*



エタニティ文庫

## 目次

専属秘書は極上CEOに囚とらわれる

5

書き下ろし番外編

永遠の誓いーもう二度と離さないー

329

専属秘書は極上CEOに囚とらわれる

こんなの、絶対に本当の自分じゃない——

日本から飛行機で約八時間の距離にあるバリ島は、サバナ気候に属し年間の平均気温は二十八度。

けれど、さほど不快に感じないのは海からの風が暑さを和らげているからだろうか。聞こえてくる波の音に導かれるように、佳乃は今夜はじめて会った男性に跨り、ゆつたりとした笑みを浮かべた。

広げた脚の間にいる男性が、低い呻き声を上げる。硬い胸筋が上下し、割れた腹筋が薄闇の中でくつきりと浮かび上がった。

「すごい……これって、ジムで鍛えてるの？ それとも、スポーツとかで自然に付いた筋肉？」

佳乃は少しだけ前屈みになり、男性の腹筋を指先でなぞった。

「バスケ、やってるんだ。そのためのトレーニングでマシンも使うけどね。だから、割と柔軟だし瞬発力もあるよ。なんなら、試してみる？」

「あんっ……………あ……………」

突然の突き上げを食らって、上体が激しく揺れる。差し伸べられた両方の掌に指先を絡め、倒れそうになった身体を支えられた。

「君は？ 日頃身体を使って何かしてる？」

緩く腰を上下させたまま、男性が訊ねる。

「し……………してない……………い、あんっ……………いやあっ……………ん、んっ……………」

返事をしようとする、男性の突き上げがいつそう激しくなった。

絡め合った指に力を込め、佳乃は目を閉じて思うままに腰を揺らめかせる。途端に下腹から脳天を突き抜けるみたいなき快感が襲ってきて、目の前にキラキラと小さな星が舞う。

「……………やっ……………気持ち……………いいっ……………。なに……………これ……………あ、ああっ……………」

まるでエロティックなメリーゴーランドに乗っているみたいだ。

「もっと……………お願……………、もっと……………あ、あっ……………ああっ……………」

目の前に降り続ける星が、時折大きな光の塊になって身体の中に溶け込んでいく。

「エロい……………それに、すごく綺麗だよ。……………まるで神鳥に乗って空を駆ける女神みた

いだ」

まさか自分が、こんな事をするとは思ってもみなかった。

日本から遠く離れ、南国の島の熱気に晒されたせいか、心の籠が完全に外れてしまったみたいだ。

きつとこれは、この五年間ただただ品行方正に生きてきた自分に対する、神さまからのご褒美に違いない。

そうでなければ、これほど眉目秀麗な男性と、こんなにも濃厚な夜を過ごしているはずがなかった。

今このときが真に南国の神々による賜物だというのなら、思いっきり楽しんで我を忘れるほどの快楽に溺れても誰も文句は言わないだろう。

忘れ去っていた性的な欲求が、身体の奥からこんこんと湧き出てくる。こんな感覚に陥った事など、今までに一度たりともなかったのに……

佳乃が夢心地になっている間にも、男性は佳乃の乳房を掌で包み込み、先端をねじるようにしていたぶってくる。

ゆっくりと捏ね回す手つきが、たまらなく淫靡だ。

「エロいって……どつちが……」

いつの間にか動きを止めた男性の腰の上で、佳乃はうっとり目を閉じてため息を吐

いた。

「君だろう？　こんなにそぞられる女性ははじめてだよ」

彼の手が慣れた感じで身体のあちこちを触るたびに、脚の間が新たにじんわりとぬめるのを感じた。

身体を開いたのは、はじめてじゃない。

だけど、いまだかつて自ら望んだ事はなかったし、快樂など自分には無縁のものであると思込んでいた。

「私だって、こんなに惹きつけられる男性に会ったのは、はじめて……。ねえ、どうせなら一生忘れられないような時間を過ごしたい。もし、今後二度と会えなくても、死ぬまで憶えていられるような快感を味わいたい……。いい？」

普段の自分なら、絶対にこんな台詞は吐かない。

今みたいな喋り方はしないし、思わせぶりの態度で男性を誘惑するような真似をしようと思った事すらなかった。

「いいよ。……ほら、こうしてじっとしているだけでも、すごく感じる。きつと俺達、身体の相性が抜群にいいんだ」

男性が鷹揚に笑うと、硬い腹筋が上下して花芽の突端に甘やかな炎が宿る。自然と声が漏れ、顎が上を向いた。

こんなのは、まったくもって予想外だ。  
まさか自分が、こんなふうには奔放な振る舞いをするだなんて——  
今まで知らなかった自身の性癖が、ついさつき会ったばかりの男性によって暴かれてしまった。

眼下にいる男性の一部が、自分の中に入っている——そう思うだけで身体が勝手に反応する。自分がこんなにも感じる事ができるなんて知らなかった。

気分は、さしずめ物語に出てくる高級娼婦だ。

ウィットにとんだ会話とともに、見ず知らずの相手と濃厚な夜を過ごす。でも、当然お金なんかいらぬ。ほしいのは、過去を洗い流してくれるほどの強烈な記憶と、我を忘れるくらい甘やかでスリリングな一夜だ。

そう、たった一晚でいい。

たとえ一生に一度しかない天からのプレゼントであっても、所詮旅先で出会ったゆきずりの人だ。

いくら相手が、驚くほど容姿端麗で身体の相性が抜群によくても、これが一夜限りの関係である事には変わりない。佳乃は偶然もたらされたアバンチュールを日本に持ち帰るほど初心じゃなかった。

「君は本当に素敵な女性だ。泣いたり笑ったり怒ったり……一緒にいてこれほど楽しい

と思った女性は君がはじめてだよ。外見も中身も、完全に俺の好みだ。……特に、下から見る君の胸……彫刻にして遺しておきたいほど完璧なフォルムだな」

男性の指先が佳乃の胸元を下り、花芽の先を摘まんだ。

たったそれだけの刺激に耐え切れず、佳乃はまたしても小さく声を漏らしてしまう。

「くっ……かーわいい……。ほんと、たまらない」

そう言って笑う男性の笑顔は、思いのほか優しかった。

男なんて、もうこりこり——そう思ってたこんな南国の島まで逃げてきたのに、向ける微笑みに心がとろけそうになっている。

佳乃は無意識に首を横に振った。

(ダメ……絶対にダメ……！)

これ以上、見つめ合い、言葉を交わしていると、本気で恋をしてしまいそうだ。

こうして男性と陸み合っているのは、あくまでも今宵限りの事であり、この先の未来はない。ただのアバンチュールの相手に、身体だけならまだしも、心まで許してしまうなんて決してあってはならない事だ。

そうならないためには、心が置き去りになるほど淫らに、この行為だけに溺れるしかない。佳乃は揺れる気持ち振り切るように、身を屈めて自分から彼の唇にキスをする。

そして、伸びてきた男性の腕に包み込まれながら、彼の硬く膨張する屹立をさらに奥

深く自らの中に招き入れた。



六月初の水曜日。

天気予報のとおり、空には今にも雨が降り出しそうな厚い曇が垂れ込めている。

「おはようございます」

都内中心部に位置するビジネス街のビルの中で、清水佳乃は居合わせた社員達に朝の挨拶をした。

「あ、清水さん。おはようございます」

「おはよう。清水さん。今にも降ってきそうな天気だね」

向けられる返事に微笑みを返しながら、佳乃はエレベーターに乗り込んで操作盤の前に立った。

それと同時に、同乗した社員達が降りる階のボタンを押す。

時間は午前七時二十分。

こんな時間に出社してくる人間は、ある程度顔ぶれが決まっている。

「今日は午後から奈良に出張なんだよ。あつちは今、晴れてるよね。どうせ地下を通る

し、傘は置いていって大丈夫かな」

「奈良ですか。そうですね、昨夜から降り続いていた雨は、もう止んでいるみたいです。でも、また南から雨雲が近づいてきているようですから、もし夜遅くまで外にいらっしやるなら、折り畳みの傘を持参されたほうがいいかもしれません」

「そうなの？　じゃあ、そうするか。いやあ、いつも役立つ情報をありがとう」  
 そう言って営業部の男性社員が、七階で降りていった。

鏡面仕上げの壁面に映る黒髪は、ここ十年来ずっと変わらないボブスタイル。パーマやカラーリングとは無縁のせいかな、髪の毛はいつも艶やかで健康的だ。

「清水さん。この間取材に来たケーブルテレビの……えーっと、誰だっけ？　眼鏡で口元に髭があるディレクター」

そう聞いてきたのは、第二営業部の主任だ。

「もしかして、笹野さんの事でしょうか」

「あ、そうそう笹野さんだ！　彼と連絡を取りたいんだけど、連絡先、保管してあるかな？」

「はい。後ほど内線でお知らせしますか？」

「うん、そうしてもらえると助かる」

「清水さん、明日トミマス商事の田中常務を訪ねるんだが、手土産は何がいいだろう？」

「田中常務は甘党なので、烏雪堂の新作和菓子がいいかと——」  
 ほんのわずかな時間に、あれこれと質問を投げかけられる。佳乃はその都度的確な返答をして、このあとやるべき事を頭の中に書き留めていく。

佳乃の勤務先である「七和コーポレーション」は、日本各地に大型スーパーを展開しており、今や海外にも多く支店を置く国内小売業の最大手だ。

そこで社長秘書をしている佳乃は、現在三十二歳で独身。勤続五年目にして秘書課主任という役職についている。

身長は百六十五センチで、体重は五十三キロ。まあまあ整った目鼻立ちは、年配の人からは美人だと言ってもらえる。どちらかといえばレトロな印象の顔をあっさりメイクでカバーし、モノトーンのスーツで身を固めれば、いかにも堅そうなデキる秘書の出来上がりだ。

社内の評判は概ね良好だし、人事評価は常にAランク以上。直属の上司である村井秀一社長からの信頼も厚く、ときに秘書というよりは右腕に近い役割を担う事もある。

しかし、恋愛に関しては、仕事で大勢の男性に関わる事はあっても、今後恋に発展しそうな気配は皆無。あえて相手を探そうという気もないし、一人きりの穏やかな生活を楽しみながら暮らしている。

今のところ、その生活を手放すつもりはないし、むしろこのまま独身を貫いたほうが幸せになれる気がする今日この頃だ。  
 「清水さん、朝一で副社長に伝えておきたい事があるんだけど」  
 佳乃の斜めうしろにいた広報部の部長が、おもむろに話しかけてきた。少々いらだっている様子からすると、あまりいい話ではないのかもしれない。

「わかりました。では、出社されたらすぐにお知らせします」

「うん、頼むよ」

広報部長が頷いた直後、エレベーターのドアが九階で開く。

降りていく彼に会釈して顔を上げる。エレベーターの中にいるのは、佳乃ただ一人だ。ほっと一息つく暇もなく秘書課がある十二階に到着した。

降り立ったフロアはしんと静まり返っている。役員達が来るまでにはあと一時間以上あるし、おそらくこの階に勤務する者はまだ誰一人出社してきていないだろう。

佳乃はホールをさっと見回してから、自席に向かって歩き出す。

「ん？」

いったんはスルーしたものの、視線を巡らせたときにちよつとした違和感を覚えた。

振り返ると、一列に並べられた観葉植物の鉢の間に、見覚えのある小瓶が置かれている。それは、佳乃が好んで買う南国の鳥で売られているビールの小瓶だった。

綺麗な緑色をしたそれは、専門店で見かける事はあるが、どこにでも売ってい



るというものではない。

「え？ 何でこんなものが……」

拾い上げた瓶は、蓋が開いていて中身は空っぽだった。いったい誰が放置したのだろうか？

佳乃は口をへの字にして考え込む。金曜日の夜にここを通ったときには、絶対になかった。

そうなると、これが置かれたのは金曜日の夜遅くか、土日の間という事になる。

（残業して遅くなった人か、休日出勤した誰かが置いたのかな……。それにしても、どうして十二階に？）

このフロアは、役員の執務室と秘書課のみ。一般社員はよほどの事がない限り足を踏み入れる機会のない場所だ。十三階には展望台を兼ねたフリースペースがあるが、今は内装工事をしていて閉鎖されている。仮に間違えて十二階で降りたにせよ、オフィスにアルコールを持ち込むとは言語道断。ましてや飲んだあとの空き瓶を放置するなど、いったいどここの不届き者だろうか。

（もし見つけたら、嚴重注意しなくちゃ。……つて、まさか役員の中の誰かじゃないよね？）

だが、佳乃の知る限り該当しそうな役員は見当たらない。

空き瓶を片手に、佳乃はふたたび歩きはじめる。途中、給湯室に立ち寄り、空き瓶を専用のダストボックスに入れた。

（そういうえば、しばらくこのビール飲んでないなあ）

自席に着いてパソコンの電源を入れると、画面いっぱいになり島の風景が広がる。

その写真は、五年前に佳乃がスマートフォンで撮ったものだ。せっかくだからと壁紙に設定して以来、ずっと変更しないまま今に至る。普段はすぐに必要なソフトを立ち上げるから、壁紙を見るのはほんの一瞬だけだ。

しかし今日は、あのビール瓶のせいとか、つい視線が画面の青い海に吸い寄せられてしまっ。

（さてと。まずはやるべき事を片付けなきゃ）

気持ちを切り替えて、画面に連絡先管理ソフトを開いた。先ほど頼まれた第二営業部の主任に内線を入れて、必要な情報を伝える。

そのあと、いつもどおりルーチン業務を終わらせ、立ち上げた画面を最小化させた。ふたたび現れた南国の風景を眺めながら、出勤途中に買ったコーヒーを一口飲む。

写真を見るうちに、頭の中に旅行に行った当時の事がぼんやりと思い浮かんできた。（もう五年も前になるんだな……）

二口目のコーヒーを飲みつつ、佳乃は少しの間だけ過去の思い出に浸る。

パリ島へは、成田から直行便でおよそ八時間かかる。日本での季節は春。現地はちょうど乾季にあたり、絶好の観光シーズンだった。

当時、佳乃は二十七歳で、新卒で入社した会社を辞めたばかり。

旅の目的は、四年と少しの間、身を粉にして働いた自分へのご褒美——というの表向きで、本当は誰も知らない国で一人きりになりたかったから。そして、一年半付き合った元カレへの感情を整理してリセットするため——

今思い出しても、心がざらついてくる。元カレは前の勤務先の上司だった。

年齢は佳乃よりも六つ年上。勤務先の創業者一族の御曹司でもある彼は、佳乃がはじめて付き合った相手だ。何もわからないまま恋人関係が続け、最後は元カレの裏切り行為で終わりを告げた。佳乃は彼に別れを告げると同時に、逃げるように会社を退職したのだった。

その足で旅行会社へ駆け込み、ものの三十分でパリ島に向かう契約を結んだ。行き先を選ぶ決め手となったのは、パンフレットに載っていた空と海の青さだったように思う。過去、何度か海外旅行の経験はあったものの、単独で国外に出るのはそのときがはじめてだった。それでも躊躇なく一人旅を決めたのは、それだけ切羽詰まっていたからだろう。

旅の日程は十日間。

特に何も予定を決めず、日がな一日ビーチで昼寝をしたり観光客で賑わう繁華街を歩いたりした。そして、帰国する前日、佳乃は生まれてはじめてのアバンチュールを経験したのだ。

相手は佳乃より三つも若い日本人男性で、滅多にお目にかかれないほどのイケメンだった。

(何もかもが素敵で、まるで夢みたいだったな……)

いかにも女性にモテそうな彼が、どうして自分とそんな関係になったのか、今でも不思議で仕方がない。むしろ、そんな関係はその場限りのものだし、帰国した当初は早く忘れてしまおうと躍起になっていた。

だけど、どれほど努力しても思い出は一向に消えず、事あるごとに蘇ってきては、よりいつそう鮮明な記憶として頭の中に刷り込まれる。どうしようもなくなった佳乃は、大学時代からの親友である水沢真奈に洗いざらいぜんぶおちまけてみた。けれど、かえて記憶がくつきりと脳に刻み込まれ、逆効果になってしまった。

結局、時間が流れるに任せているうちに、あつという間に五年の月日が経ち、今に至っている。

時間にすれば、ほんの十時間ほどの出来事にすぎない。それなのに、どうしてこうも忘れられず記憶を辿り続けてしまうのだろうか……

(……って、やめやめ!)

佳乃は頭の中に広がりそうになっていた映像をかき消し、ぬるくなったコーヒーを一気に飲み干した。そして、ソフトを立ち上げて今日一日のスケジュールを確認する。

その間に、次々と秘書課の社員が入社してきた。

現在、秘書課社員は佳乃の他に男性の課長と女性社員が四人。課長を除くと、全員が年下の後輩であり直属の部下となる。

「清水主任、これなんですけど——」

隣席に座る岡が書類を示しながら質問をしてきた。三年前、新卒で入社してきた彼女は、几帳面おかでどちらかといえば大人しい性格をしている。人柄もよく、仲のいい同期社員も多くいるみたいだ。

一方、中途採用である佳乃には、同期はいない。入社して五年経った今でもランチャイムはだいたい一人だし、アフターファイブを共有するほど親しくしている同僚もいなかった。

仕事の事を考えれば、もっと自分からコミュニケーションをとって和氣藹々わかあわいとした秘書課を目指したほうがいいのかもしれない。

けれど今は、ある問題からそうするのは得策ではないと思っていた。

秘書課の課長である丸越が出勤してきたので、頼まれていた書類を渡しに行く。

「ありがとう。相変わらず仕事が速いね。えっと、今日は特にスケジュールの変更はなかったかな?」

「はい、変更ありません」  
「OK」

丸越が親指と人差し指で丸を作った。現在五十五歳の彼は、年齢よりもかなり若く見える。だからというわけではないが、今ひとつ貫禄に欠ける印象があった。

席に戻り、かかってきた内線に対応をしているうちに八時半の始業時刻を迎えた。

パソコンでメールソフトを立ち上げ、受信ボックスを開く。佳乃が現在管理しているアドレスはふたつある。そのうちのひとつは自分自身のもの。もうひとつは、社長である村井のものだ。

社長秘書である佳乃は、本来なら朝一番に村井の執務室に向き、一日のスケジュールを確認する。しかし、彼は先月末にかねてから経過観察をしていた脳の血管狭窄きょうさくの悪化のため、都内大病院で入院加療中だ。入院期間は三カ月の予定で、その間に送られてくる村井宛の書類やメールは、彼から直々じきじきに委託された佳乃が開封し確認する事になっている。もともと主任として秘書課全体の統括も任されていた事もあり、このところ仕事の忙しさに拍車がかかっていた。社長不在の今、佳乃が担当する業務も一時的にはいえ大きく変化している。

一秘書である佳乃が、どうしてそこまで——  
 そう思われても不思議ではないが、それにはふたつ理由があった。  
 ひとつは、佳乃がそれだけ村井から信頼されているから。

もうひとつは、副社長の高石恵三を筆頭とする「高石派」と呼ばれる派閥に、トップの不在中、勝手な振る舞いをさせないためだ。

高石派がコソコソと何か企んでいるらしい——  
 そういった話が漏れ聞こえてくるようになり、必然的にできたのが「村井派」と呼ばれる現社長の派閥だ。会社を二分しかねない今の状態になったのは、佳乃が入社する何年も前の話だと聞く。

一秘書である佳乃にはどうしようもない事であり、憂えてもふたつの派閥が相容れる要素などないように思える。

救いがあるとすれば、これまで何かあっても、相容れないなりに均衡を保ちつつ、さざ波程度の争いで済んでいる事だ。

その均衡が今、村井の不在により崩れようとしている。

高石はここぞとばかりに村井派の人間に接触を持つようとしているし、実際に彼に懐柔されそうな人間が何人か出ていた。穏健派で物事を長い目で見ると言うスタンスをとっている村井に対し、高石は強硬派で迅速な利益追求を重視しがちだ。

佳乃自身は、担当である以上どうしても村井サイドの人間にならざるを得ないし、もし仮に今の立場でなくても同様の姿勢をとっていると思う。それだけ彼の事を信頼しているし、転職してはじめてのボスが村井でよかったと思つた事は一度や二度ではない。

そんな事もあり、佳乃は少しでも高石におかしなところがあれば、すぐに報告できるように準備している。できれば入院中の村井を煩わせたくないが、高石がこのまま大人しく社長の帰りを待っているとは思えない……

「じゃあ、僕はこのあと人事部に行つて、本城代表をお迎えする準備をしてくるから」  
 丸越が席を立ち、いそいそとエレベーターホールのように歩いていく。

「本城代表」とは、今日から新しく「七和コーポレーション」のCEOに就任する人物だ。

本城敦彦というその男性は現在、二十九歳。高校卒業後渡米し、世界最高ランクの大学に入学し、同校の大学院を経て同国のメガバンクに入社を果たす。そこで、経営戦略において多大な功績を上げるなどの実績を残したあと、退職。自身で経営コンサルティング会社を設立すると、瞬く間に目覚ましい実績を上げて莫大な財を築きあげた。その経営手腕たるや、名だたる経済学者も舌を巻くほど見事なものであるらしい。

若くして国内最大級の企業の最高経営責任者になる彼は、代表取締役も兼ねる。つまり、社長を除くもう一人の会社代表であり取締役副社長である高石よりも権力を持つ。

『本城君は信頼に値する男だ』

村井にそう言わしめた本城とは、共通の知人を介して知り合い、意気投合したのだと聞く。ビジネスにおいては、性別や年齢差など関係ないし、村井の人を見る能力は確かだ。

本城がどんな人物であろうと、仕事さえできれば文句などない。

ただ、不思議に思うのは、本城が入社するまで彼自身の顔写真や住所などの個人情報は一切明らかにされていない事だ。

もつとも、事前にそれらを明かしてしまうと、就任前に彼に接触を持つとする者が出ないとも限らない。

ネットの検索で顔写真くらいヒットするかと思つたが、一件も見当たらなかった。高石派への対策なのかもしれないが、そこまで大がかりな事ができるのだろうか。

今風のイケメン？ それとも、強面の体育会系だろうか？

(ま、どっちみち私には関係ないけど)

要は、自社にとって有益であるかどうかだ。

(社長が入院してすぐに就任とか、ほんとタイミンがよくて助かったかも。これで、多少なりとも高石派の増長は抑えられるはず……)

そんな事を思いながら、手際よく目の前の仕事をこなしていく。気がつけば、もう十

時半になっていた。本城の出社予定時刻は午前十一時の予定だ。

佳乃はキーボードを叩く指を止めて、席を立った。秘書課を囲むパーティションの外へ出て、役員室が並ぶ方向へ進む。

廊下右手奥が社長の執務室。その正面の部屋を本城に使ってもらう事になっている。

佳乃は本城の執務室に入った。彼を迎え入れる準備はすでに整っているが、念のため最終チェックをしておこうと思つたのだ。

(机周り、よし。窓、よし。観葉植物もよし……と)

部屋をぐるりと歩き回り、ついでにガラスに映った自分自身の身だしなみをチェックする。

「自分、よし」

小さく咳いたとき、廊下の向こうからエレベーターの到着を知らせる電子音が聞こえてきた。無意識に耳をそばだてると、役員のものではない若くはつらつとした男性の声が聞こえてくる。

「案内ご苦労さま。もう仕事に戻っていいよ」

声の主は、大股でこちらに近づいてきている。

エレベーターホールから今いる部屋まで、男性の歩幅でおよそ二十歩の距離だ。

(もしか、本城代表がいらっしやっつたんじゃ……)

佳乃は急ぎドアの近くまで駆け寄り、一歩外に出てかしまった。そして、こちらに向かつて歩いてくる男性を見た途端、驚きのあまり石のように固まってしまふ。(まさか……嘘でしょ?)

目の前の現実を受け止めきれずに、脳が拒否反応を起こしている。そうしている間に、男性は佳乃のほうに近づいてきて、ほんの一メートル先で立ち止まった。

「やあ、お出迎えありがとう。本城です。君が社長秘書の清水佳乃さんかな?」  
上質で力強いテノールの声が、佳乃に向けて発せられる。

「は……はい、そうです」

まるで、頭の中をジャンボジェット飛行機が通り過ぎているみたいだった。目の前に見える形のいい唇が、何か話している。しかし、何を言っているのかまるで耳に入っていない。

佳乃は我が目を疑い、今一度男性を見返してみた。しかし、何度見ても目の前に突きつけられた現実が変わらない。

今、目の前にいる男性こそ、佳乃が五年前に南国の島で一夜をともにした相手に違いなかった。

——キーン……

頭の中に飛行機が発する高周波音が響き渡っている。できる事なら、この場から逃げ出してしまいたい。どんなベテランの秘書でも、こんな不測の事態には対応しきれないのではないだろうか。

「——じゃあ、行こうか」

「はっ? い、行くとどこへですか?」

うっかり、思った事をそのまま口に出してしまった。秘書としてマヌケすぎる発言を悔いたところで、あとの祭だ。鷹揚おつように微笑んだ本城が、片方の眉尻を上げる。

「役員の方々に、ひと言ご挨拶あいさつしたい。まだ新しい職場に不慣れだから、案内を頼めるかな?」

啞然として動けずにいる佳乃を見つめながら、本城が微かに首を傾げた。確かに見覚えのあるしぐさに、心がくじけそうになる。しかし、秘書課主任のプライドにかけて、今ここにある危機を回避しなければならぬ。

「は……はい、かしこまりました。では、こちらへ」

破裂しそうになる心臓を押さえながら、佳乃はなんとか平静を装よそおって歩き出す。

そして、本城の進行の邪魔にならないよう気を配りながら、在室中よそおの役員の部屋を回った。

(落ち着いて、佳乃……。とりあえず今を乗り切らないと)

五年前、南国の島で見た彼は、見るからに軟派そうな微笑みを浮かべ、不遜ふそんなほどセ



クシーなオーラを振りまいていた。

しかし、目の前にいる彼は、いかにも紳士然としており、整った顔立ちにクールな雰囲気をもっている。佳乃は目前を歩く本城のうしろ姿を見つめた。

（雰囲気はぜんぜん違う。もしかして双子？ なんなら三つ子とか、いっそ五つ子とか——）

考えが突拍子もないほうに流れていきそうになり、佳乃はあわてて自分を叱咤する。いくら心が乱れているとはいえ、ここはオフィスであり今は就業時間内だ。

役員室に一通り顔を出し終えると、ようやく本来の顔合わせの時間になった。

集まってくる各部署の部課長達は、もれなく若き代表取締役を見て驚きの表情を浮かべる。

本城は大会議室に集まった社員達を前に、堂々たる風格を見せて就任の挨拶をした。

その間の佳乃はと言えば、相変わらず心の中に嵐が吹き荒れており、彼の言葉を聞きながら平静を装っているのがやっただ。

佳乃は部屋の隅に立ち、壇上に立つ本城を凝視した。

どう見ても五年前に会った男性と同一人物だ。しかし、そう断言するには相手の反応が薄すぎるような気がする。

（もしかして、私の事を憶えてない……？ もう五年も前の事だし、多少は顔立ちも変

わっているはず……。それに、あれだけのイケメンだもの。この五年の間にたくさんの女性の相手をしてきたよね）

きつとそうだ。自分はそのような女性達の中の一人にすぎない。それに、一緒にいたのは半日にも満たないほんのわずかな時間だ。

頭の中に、希望的観測がムクムクと広がります。

（ああ、お願い！ 私の事なんか綺麗さっぱり忘れていきますように！）

佳乃は壇上に向かって、精一杯の念を飛ばした。到底効果があるとは思えないが、今の佳乃はまさに藁にもすがる思いでいるのだ。

顔合わせのあと、本城は各部署の部長らと個々に挨拶を交わし、社内を見て回るべく彼らを引き連れてエレベーターホールに向かう。

先行した佳乃は、やってきた無人のエレベーターに乗り込んで操作盤の前に陣取る。本城は周囲と雑談を交わしながら、悠然と中に乗り込んで佳乃の背後に立った。

心なしか、後頭部にもものすごく強い視線を感じる。面と向かっているわけではないのに、これほどの威圧感を与えられるなんて……

目的の階に到着し、エレベーターのドアが開いた。

身を硬くして操作盤を凝視していた佳乃は、部課長達が順次フロアに出ていくのを見守る。最後まで残っていた本城が、ドアの外に一歩足を踏み出す。

(とりあえずお役御免——)

佳乃が、ほっと胸を撫で下ろそうとしたとき、本城がふいに佳乃のほうを振り返り、他の誰にも聞こえないような声で言葉を発した。

「騎乗位——」

(えっ……?)

佳乃は、はっとして本城の顔を見つめた。

その顔に浮かんでいるのは、さっきとは打って変わった不遜なほどセクシーな微笑み。佳乃の頭の中に、バリ島で過ごした最後の夜が思い出される。今、目の前にいる本城の瞳と、あの夜ベッドで睦み合った年下男のそれが完全に一致した。

彼はすべてを憶えている！

そう確信した佳乃は、遠ざかる背中を呆然と見送りながら、抱いていた希望をすべて手放し絶望した。

その日一日の仕事を終え、佳乃はいつもどおり電車を乗りついで自宅に帰り着いた。

気分はどんよりと落ち込んでいるし、叫び出したいのを我慢し続けていたせいで神経がこれ以上ないほどすり減っている。

本当にわけがわからない。

いったいなぜ、今頃になってあのときの彼が目の前に現れたのか——

しかも、自分の勤務先のCEO兼代表取締役として、だ。

こんな最悪の巡り合わせがあるだろうか？

玄関の鍵を開けながら、佳乃は最後に見た本城の顔を思い出す。

あの顔は、きつと何か企んでいるに違いない。そう思うと、自分の人生において最大の危機の真ただ中に放り出された気分になった。

「あああああ〜！ なんて!?! どうしてなの？」

家に入り、履いていたパンプスを蹴り飛ばす勢いで式台上上がる。廊下を進もうとして、上がり框に思いつきりつま先をぶつけた。

「いったあ……い……」

あまりの痛みに、廊下に倒れ込んで転げ回る。

こんな姿、絶対に会社の人達には見せられない。日頃、完璧な秘書というイメージをまとっている佳乃だが、プライベートはまるで違う。

実際、家では真逆と言っていいほど気を抜いて過ごしていた。

ようやく痛みがとおり過ぎ、佳乃はのろのろと起き上がる。そして、ため息を吐きながら居間のちゃぶ台の前でへたり込んだ。

「もう、何なのよ……。私が何をしたらっていうのよ〜」



不平不満を漏らしても、何の解決にもならない事はわかってい。だけど、そうせずにはいられないほど心身ともにダメージを受けていた。

じっとしていられず、立ち上がって庭を囲む縁側をうろろると歩き回る。

佳乃が住んでいるのは、都内下町にある築七十数年の一軒家。

持ち主は母方の叔父で、夫婦が十年前に海外に移住したのを機に佳乃が移り住んだ。

あれこれと使い勝手は悪いものの、住み心地は悪くはない。今は毎月気持ちばかりの家賃を払っているが、叔父さえよければここを買い上げて終の棲家にしようかと思いはじめるところだ。

「いったいどうすればいいの？ まずい……いろいろとヤバすぎるでしょ」

頭の中に、スーツ姿の本城が思い浮かぶ。

彼は事前に聞いていた経歴にふさわしい外見をしていたし、顔を合わせた者を一瞬で懐柔してしまうほど強烈なカリスマ性を感じさせた。

渡米後の彼は、大学在学中に主だった経済関係の資格を取得した上にインターネット関連の起業まで果たしている。のちにそれを売却したときに得た金額は、日本円にして十億はくだらなかつたと聞く。

そんな名実ともに超一流のビジネスマンである彼が、なぜ今になって佳乃の前に現れたのだろう。

彼は「七和コーポレーション」に佳乃がいると知った上でやって来たのか。

そうだとしたら、いったいいつのタイミングでそれを知ったのか。

それとも、それはただ単に偶然の巡り合わせだったのか。

(……偶然に決まってるよね？ だって、もう五年前の話だし……)

うろろろしながら考え込んだ末に、佳乃はそう結論を出した。

恐らく本城は意図的に佳乃の前に現れたわけではなく、あくまでもビジネスとして「七和コーポレーション」の要職に就く事になっただけだ。

そして、思いがけず五年前にベッドをともした相手と再会した。きつと、それまで佳乃の事など綺麗さっぱり忘れていたに違いない。

いい加減歩き疲れ、佳乃は居間の壁にもたれかかるようにして座り込んだ。

いつもなら、家に帰り着くなりリラククスし、すぐにゆるゆるのプライベートモードに入る。だが、今日に限っては心の中に大型の台風が吹き荒れている感じた。

本城が去り際に言った言葉を思い返すたびに、とうの昔に忘れ去ったはずの思い出がありありと蘇ってくる。

再会の理由はさておき、五年前に彼とただならぬ仲になったのは事実だ。

「ああ……もう、最悪……」

今後は会社のトップに就いた彼のもとで、勤務を続けなければならない。仕事をする

上で彼に従う事には何ら不満はなかった。

問題は、本城が佳乃との過去をどう思っているかなのだ。

もし彼が二人の間に起こった出来事を、会社の誰かしらに漏らしたとしたら——その可能性を考えただけで、全身が縮み上がって息苦しくなってくる。

この世に生を受けて三十二年。今までコツコツと積み上げてきたものが、たった一度の過ちあやまちのせいで崩壊するかもしれない。佳乃は畳の上に仰向けになって倒れた。

そして、本城とはじめて会ったときの事を思い出す——

事の発端はつたんは、五年前に行ったバリ島で起きた出来事だった。

十日間の旅を締めくくる最後の夜。

佳乃は一人、ビーチサイドで沈みゆく夕日を見ながらたそがれていた。

南国の空や海は素敵だし、出会った現地の人々は皆幸せそうに暮らしている。それらを見ているだけで晴れやかな気分になるし、知らず知らずのうちに溜め込んでいたストレスも発散できたような気がしていた。

しかし、夕方すぎに一人ぼっちで何もせずにいるときや、夜になって広々としたベッドに一人眠るときなど、ふととつともない寂寥感せきりょうかんに囚とらわれて泣きそうになるのだ。

わざわざ遠い異国の地までやってきて、自身の心の奥底に隠れていた孤独に気づくなんて。

(帰りたい……)

こんな気持ちになるくらいなら、旅行なんかやめて自宅にこもっていればよかった。

そんな事を思いながら海を見続けていたら、現地の若い女性二人に声をかけられた。

言葉が通じないながら身振り手振りで話すうち、一緒に近くのレストランで食事をする事になり、連れ立って店に向かったのが午後五時頃だっただろうか。

そのときの自分は、寂しさのあまり著しく危機管理能力が低下していたのだと思う。

相手が女性だったから油断していたのもあった。だが、一緒に歩くうちに何となく違和感を覚えはじめる。しかし、適当な理由を作って帰ろうと思ったときには、現地の人しか利用しないようなレストランの二階に連れ込まれてしまっていた。

しかも、席についてしばらくすると、座っていたボックス席に男性が三人合流してきた。現地の言葉で話しかけられ、こちらがわからないのいい事に明らかに度数の高いアルコールを注文され、一気飲みを促うながされる。

必死に断るものの、執拗しじように言い寄られて困惑が恐怖に変わった。そんなとき、ふらりと近寄ってきて佳乃を救い出してくれたのが本城だった。

『ごめん。この子、俺の彼女なんだ』

こんがりと焼けた小麦色の肌、よれよれのTシャツとサーフパンツ。

なにより驚いたのは、彼が思わず見とれてしまっうほどの容姿をしていたという事。

くつきりとした目鼻立ちに、完璧な口元。おまけに、一流のモデルばりにスタイルがよく、一見ただけで身長が百八十センチを優に超えているのがわかった。

くしゃくしゃに伸びた前髪を指先でかき上げ、微笑みながら言った日本語が彼らに通じたとは思わない。けれど、彼が放つ強烈なオーラが、一瞬にしてその場にいた者を掌握しょうあくしてしまつたみたいだ。

大声を上げるわけでも、下手したてに出るわけでもない。本城がにこやかに話しかけるうちに、彼らはものの見事に制圧され、あつさり佳乃を解放したのだった。

去っていく彼らの顔が、一様に蛇へびに睨にらまれた蛙かえるみたいだった事を今でもよく覚えてる。

佳乃は彼に何度も助けしてくれたお礼を言い、せめてもの気持ちとして彼に夕食を奢おごる事にした。

イケメンでモテ男のオーラ全開の本城の前に、最初はひどく気後れをして上手く喋れなかつたように思う。けれど、彼は思いのほか気さくで、その上話し上手の聞き上手だった。

少々アルコールが入っていたせいもあり、佳乃は問われるまま自分がなぜ一人ぼっちでバリ島に来たかを話しはじめた。

話すうちに感情が高ぶつてしまい、彼の前で大泣きするという醜態みにを晒してし

まったのは、今思い返してみても顔から火が出そうなほど恥ずかしい。

けれど、結局はそれをきっかけに一気に距離が縮まり、二人して彼の宿泊先に向かった。慰められつつどちらからともなくキスをして、お互いの身体にきつく腕を回していた。

それはごく自然な流れだったように思う。

決して、どちらかが無理にそうしたわけではないし、彼と一夜をともにすると決めたのも自分だ。

でも、ともに夜を過ごすにあたり、佳乃はひとつだけ彼に条件を出した。

それは、お互いに名前や素性を明かさないう事——  
不思議がる本城に、佳乃はせめて朝が来るまではそうしてほしいと頼んだ。

話をする中で、お互いの年齢だけはわかっていた。しかし、それ以上の事は知りたくなかつたし、聞こうとも思わなかつた。なぜかと言えば、彼の事を知れば知るほど記憶に残るし、そのせいで離れがたく思ってしまうのを避けたかつたからだ。

『秘密主義者なのか？』

本城はそう言って佳乃をからかい、面白がつてわざと自分の名前を告げようとした。

佳乃はそのたびに彼の唇をキスで塞ふさぎ、なおも言おうとする本城の上に跨またり淫みだらな行為に及んだ。

あのときは、自分でも信じられないほど奔放な振る舞いをした。本城との行為で生まれてはじめての絶頂を迎え、あとはもう我を忘れて彼の腕の中で乱れたのだ。一晚のうちに、いったい何度彼とキスをし、身体を交わらせただろうか。『もうこんなに親密な関係になっているのに、まだ名前を教えられない？』行為の合間の小休止に、彼に訊ねられた。

『俺が信用できない？』

そう問われたとき、佳乃は返事に窮してしまった。

『そうじゃないの。——そういうわけじゃないんだけど……ただ、もう少しだけ時間がほしいかなって……』

もともと男性に対する警戒心は強いほうだし、元カレの件をきっかけに男性不信っぽくなっていたのも事実だ。

それなのに、思いがけず本城と出会い、本来の自分ではありえない経験をしている。性的な享楽を味わっている今だけではなく、それ以外のときにも彼はたくさんの甘い言葉をかけてくれた。けれど佳乃は、それらを真に受けるほど初心でも世間知らずでもなかった。

所詮、旅先でのアバンチュール。しかも、相手は三つも年下の超絶イケメン。

『明日の朝起きたら、ぜんぶ言うって約束する。だから、今夜だけはお互いに何も知らない者同士って事にして』  
それは完全にその場しのぎの言葉だった。

すでに佳乃は、次の日の朝、彼が起きる前にいなくなろうと心に決めていたのだ。今思えば、よくもそんな嘘を吐けたものだと思う。どう考えても彼に対して不誠実だったし、たとえどんな理由があろうと嘘は嘘だ。

しかし、いかにも女性の扱いに慣れた様子の彼が、ごく普通の容姿で三つも年上の自分と本気で付き合いたいなどと思うはずがない。

彼の甘い言葉に心がとろかされる一方で、警戒心が高まっていったのは過去の恋愛で傷つきすぎていたせいだろう。

彼と一緒にいたいと思う気持ちと、今がずっと続かないという事実。彼との関係を終わらせたくないという本音と、アバンチュールと割り切って関係を断ち切ろうとする決意。

相容れないふたつの気持ちだが、そんな不実な言い逃れをさせたのかもしれない。

夜更け過ぎまで抱き合い、疲れ果てて本城が眠ってしまったあとも、佳乃はまんじりともせず一人悶々と考え続けていた。

いったい、自分はもうどうしたらいのか……

本城と過ごしているうちに、どんどん彼に惹かれていく自分に気づいていた。けれど、

どう考えても旅先で出会った年下のイケメンとの未来などありはしない。結局、佳乃は予定どおり、まだ日が昇る前にベッドから抜け出した。そして、ぐっすりと眠る本城を残して自分の宿泊先に戻り、そのまま帰国の途に就いてしまったのだ。

頭の中に、あの夜に見た彼の寝顔が思い浮かぶ。  
 「嘘、吐いちゃったんだよね私……」

両親や祖父母から厳しく教えられていたという事もあり、佳乃は子供の頃から嘘だけは吐かないよう心掛けてきた。もちろん社会人になった今は、仕事をする上で便宜的に嘘を吐くと閻魔さまに舌を抜かれちゃうよ』

昔よく祖母が言っていた言葉に続いて、幼い頃よく口ずさんでいたわらべ歌が頭の中に蘇よみがえってくる。  
 「指切りげんまん、嘘吐いたら針千本のーます、か……」

五年前に吐いた嘘だ。  
 謝罪しようにも、今さらどんな顔をして謝ればいいのだろうか？

誠意をもって「ごめんなさい」と言えは、許されるだろうか？  
 いや、許されるはずがない。

五年間も放置していたくせに、どの面おもて下げてごめんなさい、だ。

（どっちみち、遅すぎるよね……）

いずれにせよ、本城は過去の出来事を佳乃の鼻先に突き付けてきた。

そうでなければ、あんな捨て台詞ぜりふを残したりはしないだろう。

佳乃は畳の上からのろろと起き上がり、ちゃぶ台に頬杖をつく。

とりあえず、なるべく彼に近づかない事だ。

工作上、完全に接触を断つ事は不可能に近い。

本城が佳乃との過去をどう扱うつもりかわからないが、彼は超一流のビジネスマンであり、そういう人物は、決して軽はずみな言動はとらない——と、思いたかった。

いずれにせよ、油断してはいけない。

今後の展開がどうなろうと、取り乱さずに対処できるよう心構えだけはしておいたほうがいいだろう。佳乃は、そう自分に言い聞かせながら姿勢を正した。

そして、本城とは二度と個人的な接触を持つまいと心に誓うのだった。

熟睡できないまま朝を迎え、出勤の準備に取りかかる。

佳乃の朝は早い。遅くとも午前六時には目を覚まし、スマートフォンアプリで今日の天気と気温を確認する。

居間に続く縁側を歩きながら、ふと庭に咲いている紫陽花あじさいに視線を向けた。

（もう梅雨入りしたんだったな……。ジメジメ気分を一新するためにも、今年こそ布団を買い替えよう。いいかげん圧迫死しちゃうそうだし）

ここ何年か使ってきたのは、昔ながらの綿布団だ。レトロな柄を気に入っているし、温かくていいのだが、如何せんずつしりと重くて容易に寝返りも打てない。

（だから、あんなおかしな夢を見たのかも……）

ウトウトとまどろんでいる最中に、人の大きさほどもある緑色のビール瓶にのしかかられる夢を見た。あろう事か、瓶には本城が跨っており、苦しがる佳乃を見下ろしながら鷹揚に微笑んでいた。

驚いて飛び起きた佳乃は、エレベーターホールに置かれていたビール瓶の事を思い出す。そして、あれを置いたのは本城に違いないと確信したのだ。

「ふあああ……」

寝不足のせいで、ひっきりなしに欠伸が出る。

台所に行き、いつもよりも濃いめのコーヒーを淹れた。十二畳ある居間に入り、ちゃぶ台の隅に置きっぱなしにしているノートパソコンを開く。すると、一気に脳内が仕事モードに切り替わった。

まだ自宅にいるとはいえ、佳乃の秘書としてのルーチンワークはすでにはじまっているのだ。

いつもなら主要新聞のネットニュースをチェックし、必要と思われる記事を閲覧する。しかし、今日に限っては、それを後回しにして主だった企業の人事ニュースを開く。

「あつた……『七和コーポレーション』CEOに本城敦彦氏。米国名門大学院修了。東京都出身。二十九歳——」

前もって取材の予定が組まれていたらしく、本城は昨日の午後大手経済新聞社の取材を受けていた。記事に添付されている彼の写真は、驚くほどイケメンに写っている。

図らずも胸の奥がじんわりと熱くなり、佳乃はあわてて写真から目を逸らした。

（は？ 今の反応は何？ ……まさか私……いや、ない！ つていうか、あっちゃダメでしょ！）

佳乃は、とっさに自分を戒め、冷静になるべく深呼吸をする。過去は過去として、すっぱり切り離して考えなければ、馬鹿を見るのは自分自身だ。

佳乃は唇をきつく結び、ふたたび記事を読み進めた。

「——米国公認会計士、公認内部監査人資格取得……。起業したコンサルティング会社で得た利益の大半を世界各国のNPOなどに寄付。自らも発展途上国に向き、現地に学校や病院を設立するなど、慈善事業にも積極的……。へえ、そうなんだ……」

本城敦彦は、成功した起業家であるばかりか、本物の慈善家でもあるらしい。

いつもなら淡々と進む朝の時間なのに、今日に限っては胸の中がざわついて仕方がな



かった。

「ああ……もう、ほんと勘弁して！」

昨日から、いろいろと調子が狂いすぎている。その原因は明らかに本城だし、彼のせいでこんなにも心を乱している自分を、我ながら不甲斐ないと思う。

佳乃は視線だけ動かして、パソコンの画面に表示された本城の写真を見た。

濃紺のスーツに同系色のネクタイを締めている彼は、五年前に見たときよりも格段に男振りが上がっている。もともとあった目力は、さらにパワーアップしているし、きちんとした格好をしても体格のよさは相変わらずだ。

なんだかんだ言っ、五年経った今もまったく忘れられていない。本城本人の事もとより、彼とともに眺めた南国の夕日の色や、彼がどんなふうに関わったのかも――

「わあああああ！ わ、わ、私ったら、何を懐かしく思い出しちゃってんのよ！」

いつの間にか閉じていた目をカッと開けると、佳乃は弾かれたように座布団から立ち上がった。

用意した朝食をそそくさと平らげ、無心を心掛けながら出勤の準備を済ませ玄関を出る。

そして、自宅から自席に着くまでの間、これ以上余計な事を考えなくて済むよう、

ずっと頭の中で一人しりとりを続けたのだった。

出勤して自席についた佳乃は、その日のスケジュールを確認したあと、パソコンを開けて会員制のビジネスデータベースにアクセスする。

数ある新聞や雑誌記事はもとより国内外の企業情報を集積したそれは、役員のみならず彼らをサポートする秘書にとつても欠かせないツールだ。

（あ、タタラ物産の副社長がヘッドハンティングされたって噂、本当だったんだ……。森本本舗、七年ぶりの赤字転落、か……）

新しい情報を脳内にインプットしつつ、朝一で配信された記事をチェックして業界や市場関係の記事を閲覧する。中でも重要と思われるものを選び出し、自分用に保存した。一通り朝のルーチン業務を終えると同時に、内線電話が鳴った。時計を見ると、始業時刻ジャストだ。

「はい、清水です」

「ああ、清水さん、おはよう。本城だけど、ちょっと執務室まで来てもらってもいいかな？」

彼の声を聞いた途端、受話器を持つ手がわずかに震えた。

自身の過剰反応に戸惑いつつ、佳乃は秘書としての立場を貫くよう自分に言い聞か

せる。

「おはようございます。わかりました。すぐに伺います」

即答し、小さく深呼吸をしながら席を立つ。隣席の岡に一声かけ、佳乃は本城の執務室に向かった。

過去の出来事について何か言われるのだろうか。さすがに、昔話を盾に何かされたりとかはないと思いたい。しかし内容が内容だけに、彼の出方がはっきりするまで油断はできなかった。

「失礼します」

ドアをノックして中に入ると、そこには先客がいた。

「ん？ ……ああ、清水さんか」

来たばかりなのか、副社長の高石がデスクの前に立ったまま佳乃のほうを振り返ってきた。

「副社長。おはようございます」

高石が小さく頷き、またすぐに正面を向く。

その隣には、彼の秘書であり実の娘でもある高石舞が立っていた。一呼吸置いて振り返った舞が、佳乃を見て軽く会釈をする。佳乃はそれに応えて、二人の斜めうしろに控えた。

小顔ではつきりとした顔立ちをした舞は、自他ともに認める今時の美人だ。彼女は、現在入社三年目の二十五歳。入社後すぐ秘書課に配属され、父親である副社長の秘書になった。

朝、秘書課に彼女の姿が見えなかったのは、出勤後そのまま副社長の執務室へ出向いたからだろう。

「やあ、清水さん。君を呼んですぐに副社長がお見えになってね。でも、ちようどよかった。実は昨日、村井社長のところにお見舞いに行かせてもらったんだ」

本城はデスクの椅子からおもむろに立ち上がり、高石を四人用の応接セットのほうへ誘導する。

高石はちらりと舞のほうを見て、ソファに座った。その横に舞が座り、本城に手招きされた佳乃は、必然的に彼の隣に腰を下ろす。

「社長は思ったより、お元氣そうでしたよ」

「そうですね。それはなにより」

本城が言い、高石が応じる。

佳乃自身、症状が落ち着いてきた村井の病室を週に一度は必ず訪れている。先週は二度面会に行ったが、確かにずいぶんと顔色がよくなってきていた。

「そのときに少し話をさせてもらって、もう社長の了承は得てあるんだが……清水さん、



君は今日から僕の秘書になってもらう」

隣にいる本城が、身体ごと佳乃のほうを向いた。思いがけない彼の言葉に、佳乃は少なからず驚いて表情を硬くする。彼は口元に穏やかな微笑みを浮かべているが、その視線は佳乃の心の奥まで見透かそうとしているほど強い。

「えっ？ いや、しかし、先ほども言ったとおり、本城代表の秘書には、ここにいる高石舞さんが適任だと思いますよ」

先に声を上げたのは、佳乃ではなく高石だった。

「清水さんは、ただでさえ社長不在で忙しいですしね。それに、主任として秘書課全体の統括も任されている事ですし——」

「確かに清水さんは、両手に余るほどの仕事を抱えているのかもしれませんが、しかし、彼女の秘書としての能力は非常に高いと社長から聞かされています。それに、高石さんは現在副社長の秘書を担当していますよね」

本城の視線が、佳乃から高石へ移った。

直前まで舞に何やら目配せをしていた高石は、本城と目が合った途端あからさまに渋い表情を浮かべる。隣でかしくまっまっている舞が、ちらりと佳乃のほうを窺ってきた。

「いやいや、私の秘書の件は、どうとでもなります。高石さんは、このとおり若くて綺麗ですし……これからあちこち連れ歩くには彼女みたいに華やかな女性が好ましいと思

いますよ。彼女自身、本城代表の秘書になるつもりで、いろいろと準備を……ねえ、高石さん」

高石が、妙に意味ありげな視線を舞に投げかける。

「はい」

高石に同意を求められて、舞はにっこりと微笑んで本城を見た。その頬には、くつきりとしたえくぼが浮かんでいる。

いったい何が「はい」なのかはさておき、高石の持論には少々ムツときてしまった。確かに佳乃は舞よりも七つも年上だし、外見上見劣りするのは否定しないが——

「私、本城代表のお役に立てるよう、精一杯頑張ります！」

舞が出した、いかにも芝居がかった声が部屋の中に響き渡る。それを聞いた高石は、満面の笑みを浮かべて頷いた。

「うん、頑張りなさい。ねえ、本城代表。高石さんもやる気十分ですし、いろいろと足りない部分はあるかもしれませんが、ここはひとつ社長の意向よりもご自身の英断で高石さんを秘書にしてみてくださいませんか」

おもねるような高石の声に、佳乃は密かに鳥肌を立てた。普段、部下に横柄な態度を取りがちな彼のそんな声を聞くのは、これがはじめてだ。

「いや、清水さんに秘書をお願いするのは、僕の意向でもあるんです。僕自身の英断

で——とおっしゃるなら、なおの事僕の秘書は清水さんをお願いしたい」  
それまでにこやかに話していた本城が、一変して冷静沈着なビジネスマンの表情を見せた。

途端に高石が顔を歪める。

「しかしですね——」

「そもそも僕がこの会社に来たのは、これまでの経営を見直し将来に向けてさらなる躍進を遂げるためです。そのためには、いろいろなと足りない部分があるかもしれない。秘書をそばに置く余裕などありません。僕が秘書に求めているのは、外見ではなく中身です」

本城に真正面から見つめられて、高石はたじろいで口ごもった。

「……しかし、人事部長の意向では——」

「人事の最終的な決定権は誰にあるか、ご存じですよね？」

そう言われて、高石はさすがに口をつぐむ。

高石と対峙する本城は、相手に有無を言わせないほどの圧倒的なオーラを放っていた。あのときと同じだ——

五年前、はじめて会ったときの彼も、今と同じように一瞬で相手を黙らせて屈服させてしまった。ただし、当時と違い彼の顔に浮かぶ微笑みは驚くほどクールでビジネススラ

イクだ。

「では、僕の秘書は清水さんで決まりですね。他に何か聞きたい事はありますか？」

本城は、いくぶん表情を和らげて高石のほうに身を乗り出した。

「あ……いえ、特には——」

「そうですね。では、それぞれの仕事に戻りましょう。——という事で、よろしく、清水さん。さっそくだが、君が社長に出したこれまでのデータを適当にまとめて僕に再提出してくれるかな？ できれば、明日の午前中までお願いしたい」

佳乃が社長秘書になってから、今月でちょうど五年経った。

その間の膨大なデータを再提出する——しかも、適当にまとめて——という事は、それなりにデータを集積して整理してから出さなければならぬ。

「はい、承知しました。すぐとりかかります」

佳乃が即答すると、本城は満足そうに頷いてソファから立ち上がった。

置いてきぼり状態だった高石は、どうにも納得がいかないといった表情を浮かべながらそれに倣う。そして、隣にいる舞を急ぎ立てるようにして部屋の入口に向かった。佳乃の横を通り過ぎた舞は、あからさまに不満そうな表情を浮かべている。

それを見た佳乃は、昨日ロッカー室で聞いた舞のお喋りを思い出した。

『まだ内緒なんだけど、本城代表の秘書は、私よ。パパ——じゃなくって、副社長が人

## 立ち読みサンプル はここまで